❒　複合施設の設置及び運営に関する懇談会
第５回 児童育成施設分科会　議事録要旨

日　時	平成 22 年 3 月 9 日（金）　19:00～21:00
場　所	荒川区役所 4 階 庁議室
出席者	〔委　員〕　阿久戸光晴分科会長、小林敦子副分科会長、 志村博司委員、竹内捷美委員、吉田詠子委員、斉藤邦子委員、 上田寛子委員、高田忠則委員、仲村　威委員、北川嘉昭委員、 高梨博和委員、友塚克美委員 〔オブザーバー参加〕　濱島計画課長、小泉児童青少年課長、 佐藤社会教育課長、鈴木指導室長 〔事務局〕　飯田特命担当課長、中野企画係長、谷井企画係主査、須田主事

１［事務局説明］
配付資料の説明（児童育成施設分科会まとめ（案）、第２回懇談会での意見のまとめ、複合施設における相互連携について、荒川区内児童育成施設プロット図、子育て支援機能について）

２［意見交換］
児童育成施設分科会まとめ（案）について
●　子育て支援機能について

・　汐入のお母さん方の要望に応え、「汐たま・子育て喫茶」をはじめた。子育て中のお母さん方は、子育てひろばや育児相談のなかでメールアドレスを交換するなどして、ファミレス等に集まるが、そういった場所は長居ができない。仲間でいくと（子どもがいるので）非常に
うるさいので邪魔にされる。子どもを連れて和む場所がない。お母さん方は構えなくても気軽に来られる場所が欲しいと思っている。

・　ひろば館やふれあい館では飲み食いができず、なかなか心の扉を開ける作業ができないが、お茶を飲んだりして、その間、一瞬でも子どもが手から「ほっ」とすることでお母さんはとても和んでそれまで中にこもったものがでてくる。そういう環境づくりが必要。

・　（汐たまに）人が集まることで情報が飛び交い、その中で起きようとしていることは、自分の子どもの手が離れたら、「汐たま」を手伝うという話がでてきている。

人が集まることでいろいろな会話ができ、会話ができることで、人のつながりができ、次の話が出てくる。

・　お母さんたちは、自分の子どもの発達や育て方について、いつも不安を抱えている。幼稚園にちょっとしたアーケードができたが、そのちょっと場所で、友達同士で語らっている。
お母さんも時には、子どもから離れ自分自身の時間を持ちたい。そういう時間も大事だと思っている。

・　ふれあい館も日常的に児童事業を行っており、お母さんの相談にも関わる形で子育て支援機能をもっている。ふれあい館は、それぞれの事業者の発意に基づいて事業を行っている。全体としてのレベルアップや人材育成事業の充実という観点では、現在、区に児童指導の担当職員がおり、児童事業の研修等を行っている。
仮に荒川区に中心となるような施設ができれば、その機能を児童育成施設に移し、リーダー的な施設に位置づけられないかと思っている。

・　本で調べるということより、本で読んで得た知識を自分のものにするために、例えば実験してみようとか、絵を描いてみようということで、中心館が図書館と一緒にあることの意義が見出せる。

・　親御さんの子育てについての不安・孤立感は依然として高く、家のなかにいるだけでは不安が高じて外へでたいという気持ちが非常に強い。ひろば館・ふれあい館を含めて、親同士が集う場所はたくさんあるが、いついってもたくさんいるという状況。そのような施設がたくさんできることは非常によいと思う。

・　ふれあい館・ひろば館は乳母車を押して日常的に使う場所だが、たまには少し離れた場所でリフレッシュ、中心館で集うとか、地域の違う人たちと交流することは、今の子育てには必要ではないか。

・　たんぽぽセンターに行くには心理的な抵抗があり行けない部分がある。母子孤立の話もあるが、それが児童虐待に結びつかないようにすることが大事。この施設が入りやすい施設であれば、未然に防げるのではないかと思う。

・　集まる場というのは非常に重要。今回の施設は「いかにすると人が集まるのか」そのあたりを考えつつ計画ができればと思う。小さいお子さんとお母さんだけでなく、中・高生も視野にいれつつ、集まる施設ができればと思った。

・　悩みを抱えているお母さん方がどういうタイミングで心の中の悩みを聞いてもらいた

いかということは、相談窓口があればいいというものではなくタイミングがある。そういう意味で、この施設にその機能をいくらか残すことは大きな意味がある。

● 図書館・文学館・児童育成施設の連携について

・ 図書館・文学館は「本」にかなり関連性がある。児童育成施設は絵本だけは共通点がある。あとはどういうつなげ方になるかだが、福島市のこむこむは、隣に NHK があり、NHK で子どもが喜ぶようなことができると思ったが、入口が別だったので、あれでは連携が難しいと感じた。

・ 時間帯についても、子ども施設は早めに終わるが、図書館・文学館は遅くまでやっていられる。子ども施設が終わって真っ暗になってしまう形でいいのかという気がするので、双方で使えるところは相互利用ができるようにしていくことが一番。そこをどうしていくかを考えることが一番大事だと思う。

・ 絵本を中心とした連携をしたほうがいい。図書館の中に子ども図書館が入るわけだが、ここでは、子ども図書館、記念館、絵本館のひとつのシンボルをつくるべき。

・ 荒少連が今回４５周年を迎えるが、そこではボランティアの連携ができている。一番最初の種は、０歳児や３歳児が集うことからはじまる。今回の児童育成施設も、図書館が隣にあるので、子どもたちの学習に関して通うきっかけもできてくる。
０歳からその図書館にずっと通うということ、その導線をつくることが一番の狙いの中に児童育成施設をおく意味がある。

・ 「親子」がキーワード。親子が楽しく集いあえる、ふれあえることが今回の複合施設の大きな意味だと思う。

・ ３施設が並列ではなく、図書館、児童育成施設、文学館だと思う。児童育成施設は親子、子どもだが、図書館は、読む・調べるだけではない機能を持っている気がする。荒川らしいまちづくりの発信地だったり、コミュニティを作りだすところだったり、いろいろなものを

図書館ら発信していく場になっている。

・ どのような人でも分け隔てなく様々な要求を持って、いろいろな年代の人が図書館に来ると、そこと児童育成施設がうまく連携し一体で、子育てや児童の健全育成の中核にな

って進めていくようになるととてもいい。

・　３つの建物を別々に考えるのではなく、全館で一つと考えると、親子で来る、友達同士で来る、大人が来る、夫婦で来る、その人たちがここでどのようにすごすが考えると、自分の希望するものがいろいろあったほうがいい。どうしたら、来た人が勝手に自分の思いどおりにできるかということ。

・　児童育成施設と図書館が一緒にやるという優位性を活かしたものができればと思う。子どもがぜひ来たい施設ということで親や祖父母が連れてきて、子どもが遊んでいる間は図書館に言ってみよう、文学館にいってみようということで、改めて大人も図書館を子どもとっ所に利用し、一緒に楽しめるような施設、どの年代が来てもそれなりに楽しめるような施設を追求すれば、結構面白いものができる。

・　児童育成施設は具体的な体験ができる場で、図書館側はやや抽象的な概念を学ぶ場。具体的な体験と抽象をつなぐような施設の在り方が非常に重要ではないか。

・　直接的な体験は本当に大事だ。芸術的方面の能力、体力的方面の能力、音楽的方面の能力等いろいろな能力を持っているお子さんが来て楽しめる施設が非常に重要だと思う。

・　子どもをどう育て、家庭にどう生きる力を与えるかということ、そこから導線、多くの賑わいがあるところで児童育成施設を機能するなら、図書館にも賑わいができるし、文学館（吉村昭氏）にも尊敬がわいてくる。

・　図書館と絵本館を分けないで、図書館にできるかぎり絵本館的要素、少年少女文学的要素を取り入れることが、他の図書館との機能分化になる。

●　館長について

・　座長から計画段階から図書館を運営する人、図書活動を推進する人が入っていないと建築家の自己満足的なペースになってしまうので、然るべき館長になりうる方を同時に探していくことが大事だという発言があった。

・　区が責任を持って、熱意を持ったトップの人たちやそこで働くスタッフを早く揃え、コンサルタントに任せず、よい施設を作ってほしい。

・　児童育成施設と図書館の両方を見る人がいるといいのか、３つそれぞれにトップがいたほうがいいのかわからないが、うまく連携しながらトップを早く決めることが必要。

● 今後の施設整備にあたっての検討事項

・ 屋内で体験できる施設は重要

・ 児童に関するセンター的機能が今後必要になる。飽きられない施設にするために、運営を左右するソフトの工夫がメインである。

・ キーワードは子どもたちが夢を育むようなところということだと思うが、それに関して異論はない。体験を通して学んでいくことを中心にした施設ということが見えにくい。一番の体験的なところを学びとの関係で、知識として定着するためには、豊富な体験がなければ無理。いろんな調査のなかで荒川区の子どもたちは体験・経験が足りないとあるので、その補完ができる施設であってほしい。

・ 何を体験させるのかということとどんなことを具体的に体験させるといイメージを共有できるのかというところの煮詰め方が足りなかった。

・ 体験的学びにはどのようなものがあるということは、皆さんで出し合ってやっていかないと具体的に見えてこない。

・ 「体験的遊ぶと学びの機能」が中心で、良いプログラムと担い手があれば、低コストでかなりいいものができる。

・ 中学生と小さい子がぶつかって怪我をしないように、小さい子どもが使う部分と小・中学生が使う部分のスペース分けが必要。

・ 荒川区には子どもたちが思いきり楽しめる児童専用施設がないので、子どもが自分の城として遊べるという位置づけは大きい。

・ ふれあい館、ひろば館で児童育成をやっているので、その中心的な役割を果たし、発信もしていけるといい。

・ 荒川区には産業技術専門学校、首都大学等があり、また、退職した先生方にご協力いただくとよいと思う。芸大とも連携しているので、芸大 OB の方にも芸術教育でご協力いただいており、この施設においてもご協力いただくとよいと思う。

・ 施設を支えるのは「人」。支える人たちをどう育てていくか。人材となる人たちが自由に入ってこられるような仕組みを作っていくことがこれからの課題。

・　ソフト面については、プログラムと担い手がきちんとしていれば、時代にあったものに発展していける。あまり固定しない施設であってほしい。

・　子どもたちにとって、自分の興味が持てるものがどこにあるというか、食育で子どもにできるようなものがあればよいと思っているが、これからの人生の出発になるような経験が他分野にわたろできることを意識した体験があるといい。

・　ネーミングは、「記念館」「中央図書館」かなり硬い。「みんなの実家」はすごくいいネーミングだと思う。夢がないとダメ。「子どもの森」「子どもの城」「プレイランド」とかでもいい。「スリーリンク」とか何か名前がほしい。

・　ふれあい館・ひろば館等のいま区内全体にある館のまとめ的なものだけではもったいない。ほかではやらないことをやる施設にするのか、中心的な機能を持たせるのか、その辺が混同されて議論されているから、子育て支援的なものは要らないという議論になると思う。
子育て支援機能は、相談事業、情報提供などで、子育て支援という言葉が混ざって使用

されているので整理しないとわかりにくいと思う。

・　交通アクセスについて、自転車を中心として考えるか、コミュニティバスの経路を変更するのか等検討し、来やすい導線を作れば人は来ると思う。

・　最終的には施設が来る人を選ぶのではなく、来る人が施設の在り方を選んでような意見がでるような施設になっていくべき。

・　子どもは遊びながら学び、体験するから自分の力が蓄積していく。多くの体験ができる場、お母さん方も一緒に行き、集って楽しい、時には子どもだけが集まり、親だけで夢中に遊べる、そういう様々なパターンが組み合わされるからここが面白いという施設を望む。

・　学校教育とは違う体験をしてもらいたい。子どもたち自身が発見できる、そういう体験をしてほしい。

・　「科学体験」「社会・生活体験」「芸術体験」が３つの柱になる。お金をかけない科学実験施設の可能だと思う。「社会・生活体験」では、昔遊びや技術的な伝統的なものを、「芸術的体験」では芸術系のワークショップをもりこんでほしい。

・　基本コンセプトをどう案が得るか。「技」が一つの基本になると思う。

・　「児童育成施設」の名称が問題。たとえば「体験館」「子どものための夢創造館」など事務局で考えていただければと思う。

・　理念は『児童憲章』。「児童は人として尊ばれる、社会の一員として重んぜられる、良い環境の中で育てられる」ということで、荒川区の児童が良い伝統、良い区政の中で自分が自分を成長させていく権利がある。それを支援していくのがこの３つを統合したものであり、客よせではない。

・　この施設が成功するかどうかは、良い館長と同時に、営利主義ではない、本当に熱意を持って子どものことを考えていただける、人間味豊かな実行力・構想力のある方を見出していくことが５０年続くものになる。

・　児童育成施設をも要する図書館、絵本、文学館は全国にない。これを活かすことがセールスポイントになる。

３［事務局説明］今後の懇談会及び分科会について

第３回懇談会　平成 22 年 3 月 24 日（水）　午後 7 時から